

「自ら学び続け 学び合う子供」 ガイドブック

【別冊資料】 Version.1

～指導案の作り方と授業づくりのヒント～



令和4年5月
西部教育事務所

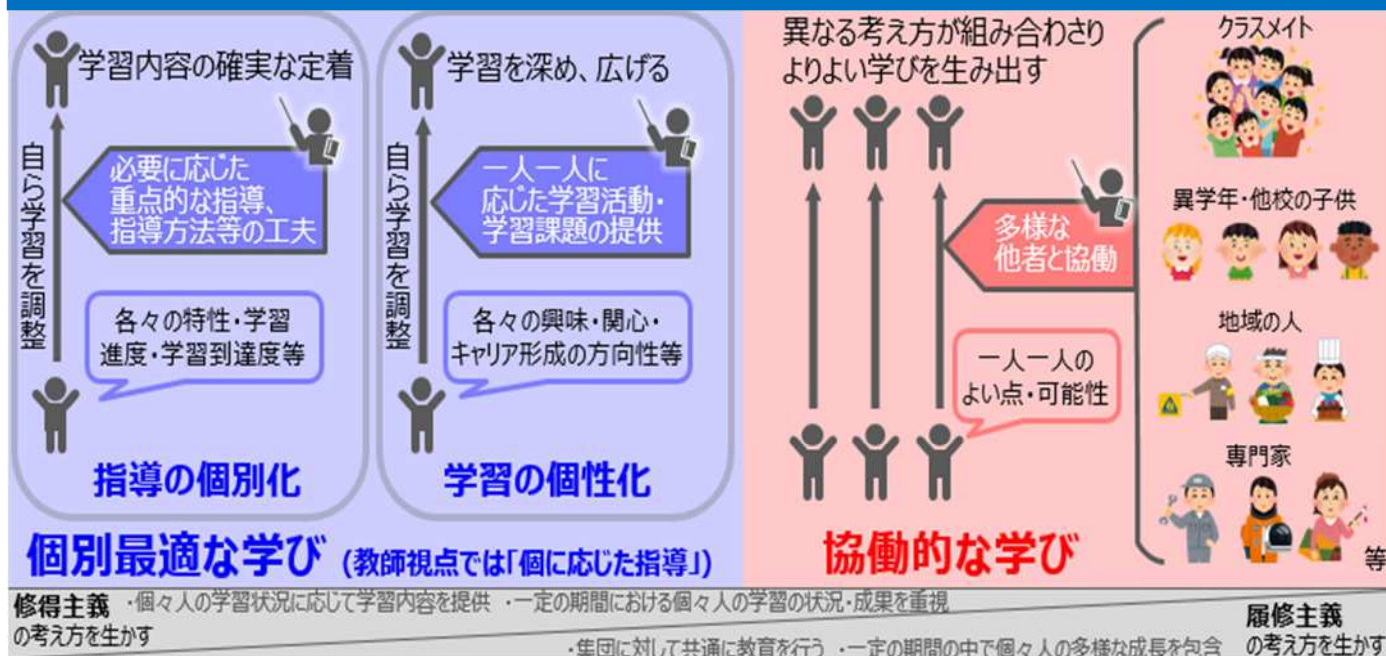
資料①

【「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実】

「個別最適な学び」は学習者の視点から「指導の個別化」「学習の個性化」の2つの側面に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することが重要です。

教師の視点から整理した概念が「個に応じた指導」です。授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切です。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）



※参考 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)文部科学省初等中等教育局教育課程課

「指導の個別化」

- 少人数・習熟度別指導
(例) より少人数で、一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じた指導
- 授業の効率化
(例) 提示資料等の共有・保存、ICTによる学習ドリル活用、配布資料(紙媒体)の軽減 など
→ 効率化された時間で、より支援の必要な子供や協働的な学びの時間に利用する。
- 学習履歴を元に、一人一人の課題と学習方針を決める。

「学習の個性化」

- 疑問に思ったらすぐに調べる。質問する。
(例) 先生にたずねる、教科書・資料・図書・インターネットで調べる など
- 課題に対して自分で学習方法を決める。
自分の方法でまとめて話し合う。
(例) 社会科や総合的な学習の時間でインターネット・電子書籍・本・雑誌・現地インタビュー・メールなどを使用し、自分で調べる。
プレゼンテーション・新聞・ポスター・動画・イラスト・劇 など発表の仕方やまとめ方を自分で選ぶ。

「協働的な学び」

- 探究的な学習や体験学習などで、地域の方々と協働する。
(例) 生活科や総合的な学習の時間で、地域の方々と専門家との対話や交流を行う。
- 共通の課題に取り組んで、教え合い、学び合う。
(例) 各教科等におけるペア学習、グループ学習など
- 個別に調べたことを共有し、議論・フィードバックし合うことで、考えを広げ、深める。
(例) 個々に調べたことを発表し、感想交流・質疑応答・情報交換を行う。知識の共有、新しい視点の獲得、問いを見だし、さらに調べ、思考することで学びを深める。



学習指導要領において、情報活用能力が学習の基盤となる資質・能力と位置付けられ、これまで以上にコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切に活用した学習活動の充実とともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の取組を活性化していくことが求められており、その際に、ICTの活用が効果的であると考えられています。

参考：GIGAスクール構想の実現に向けて（文部科学省）

<文部科学省>

【「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実】

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01317.html

【GIGAスクール構想の実現について】

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm

GIGAスクール構想、ICT環境整備・運用、ICT活用に関するリンクがあるサイトです。

【「StuDX Style」について】

<https://www.mext.go.jp/studxstyle/>

「すぐにでも」「どの教科でも」「誰でも」活かせる1人1台端末の活用方法に関する優良事例や本格始動に向けた対応事例などの情報発信・共有のためのサイトです。

<佐賀県>

○佐賀県教育委員会事務局学校教育課「教育DX推進プロジェクト」Web サイト

<https://www.pref.saga.lg.jp/kyouiku/list01913.html>

ICT活用教育について、豊富な実践事例が紹介されています。

○佐賀県教育センター

<https://www.saga-ed.jp/>

授業に役立つコンテンツとして「授業に役立つ実践研究」等が紹介されています。



【コラム】全ての子供が学びやすい授業づくり

特別支援学級や通級による指導では、個別の指導計画に基づき、一人一人の障害の特性や状態に応じた指導や支援が行われています。通常の学級においても特別な配慮を必要とする子供がいる場合があります。特別支援教育の視点を通常の学級の授業づくりに活かすことは、特別な配慮を必要とする子供たちにとっては「なくては困るもの」、他の子供たちにとっては「あって便利なもの」となります。このことは、全ての子供たちが学びやすい授業、学習活動に参加している実感や授業内容を理解できた達成感をもつことができる授業としての効果が期待されます。多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」を一体的に充実していく手立てとして、これまで培ってきた特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに取り組んでみましょう。



- ・教室の教材や掲示物の配置を意図的に行う。
 - ・授業の初めに全体的な見通しを提示する。
 - ・言葉だけでなく、視覚的に提示する。
 - ・具体的に短い言葉で話す。
 - ・発表や話し合いの仕方等の手順を示す。
 - ・興味関心、習熟度に合わせて課題を準備する。
- など

資料 ②

【指導案作成】

① 指導案の意義と一般的な構成



指導案って、何をどのように書いたらいいのだろう？
そもそも、何のために指導案を書くの？

【指導案の意義】

授業者は指導案を書くことにより、自分自身の授業に対する意図が明確になり、自信を持って授業に臨むことができます。このことは子供に確かな学力を身に付けさせる上でとても重要なものだといえます。指導案の中で次のような点が明確になるようにしましょう。

【指導案を作成する上での大切なポイント】

- ・その授業がどのようなねらいで行われるか
- ・どのような指導の工夫をして1時間のねらいに到達するのか
- ・子供の課題や理解度の差にどのように対処していくのか



第○学年 ○○科学習指導案

○○○○年○月○日(曜)

○○○○教室

指導者 ○○ ○○

- 1 単元(題材)名 *教科によっては、「題材」とするものもある。例えば、音楽、図画工作、美術、技術・家庭、特別活動など。社会は、「小単元」とするものもある。道徳は「主題名」としている。
- 2 単元(題材)について
 - (1) 単元(題材)観
 - (2) 児童(生徒)観
 - (3) 指導観
- 3 単元(題材)の目標
- 4 単元(題材)の評価規準
- 5 指導と評価の計画(全○時間)
- 6 本時の学習
 - (1) 本時の目標
 - (2) 本時の展開

児童生徒の実態をスタートに、(1) 児童(生徒)観 (2) 単元(題材)観 (3) 指導観の順に書くパターンもあります。



【佐賀県教育委員会「教師のしおり」より】

② 指導案作成のためのポイント

単元観・題材観	・本単元で身に付けるべき力や、単元や題材の価値や系統性等を記述します。 ＊単元や題材を通して身に付けるべき力 ＊単元や題材の価値や系統性 ＊使用する教材，題材の持つ特性や特徴
児童観・生徒観	・学習歴や本単元に関わる子供の姿，客観的な実態を記述します。 ＊本単元に関わる学習歴と学んだ内容 ＊身に付けるべき力における子供の実態 ＊学習を進める上での課題点や留意する点
指導観	・上の2つを踏まえ、単元全体を見通して記述します。 ＊単元目標を達成するための指導の工夫 ＊個別の支援が必要な児童生徒への具体的な支援の手立て ＊他教科や学校生活・社会生活とのつながり
単元の目標	・単元を通した目標や評価規準を記述します。 ＊単元を通して<u>身に付けるべき力</u> 1文でまとめて書く場合と，3観点ごとに書く場合がある。文末は、「～できる。」「～に気付く。」などと学習者を主体として記述する場合が多い。
単元の評価規準	＊子供の姿どのような学習状況となっていれば，単元の目標を達成できたと判断するのかを記述する。文末は、「～している。～しようとしている。」など
指導と評価の計画	＊毎時の主な学習活動，指導上の留意点，評価とその方法 単元の評価規準で示した評価の漏れがないように計画する。
本時の目標	・本時における目標や学習活動の具体を記述します。 ＊本時で身に付けさせたい力と学習活動の具体を簡潔に記述する。『単元目標』と『指導と評価の計画』との整合性にも留意する。
本時の展開	<u>学習活動</u> ＊子供が実際に行う活動 子供視点の文章で書く。予想される子供の言動もこの欄に起こす。 <u>指導上の留意点</u> ＊それぞれの学習活動で行う具体的な指導・支援の手立てや配慮 <u>評価</u> ＊原則，B基準となる子供の姿とその基準に達しない子供への手立て

③ 指導案の記述例

指導案作成の参考資料として、「教師のしおり（佐賀県教育委員会）」や佐賀県教育センターのホームページに指導案がたくさんあります。是非、活用してください。

<https://www.saga-ed.jp/contents/kouza-jyugyou/> <https://www.saga-ed.jp/contents/all-over-japan/>

「単元（題材）観」、「児童・生徒観」について

「単元（題材）観」って、どんなことを書けばいいのだろう？
「児童（生徒）観」は、子供の日頃の様子を書くところだな。

POINT

「単元観」は、本単元で身に付けるべき力、単元や題材の価値や系統性を記述します。
「児童（生徒）観」は、学習歴や本単元に関わる子供の姿、客観的なデータで表れた課題点や留意点を書きます。では、具体例を見ていきましょう。



【単元（題材）観】

【記述例】本単元は、学習指導要領の「B書くこと」の内容（１）イ「自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」、オ「文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見つけること」を受けて設定したものである。

この題材は、友だちに知らせたいものや出来事についてメモをし、それを基に簡単な組み立てを考えながら書き進めていくことができるようになっている。簡単なメモから詳しいメモに書き換えることで、題材に必要な事柄を集め、一人一人の気持ちや経験を大切に、楽しんで書くことができる。さらに、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることで、自分の伝えたい内容を明確にしたり、「はじめ - 中 - おわり」などの構成の良さに気付かせたりすることもできる。また、書いた文章を読み合い、互いに感想を伝え合うことで、自分や友だちの文章のよいところを見つけることもねらいとしている。

書く活動としては、２年上「かんさつ名人になろう」で詳しく書く学習をしたことを受け、本教材で簡単な構成について学習し、２年下「お話のさくしゃになろう」では、それらの既習事項を生かしてお話を作る学習へとつなげていく。

【児童（生徒）観】

【記述例】本学級の児童は、これまでの学習で観察して気付いたことを詳しく書くことを経験している。文章を書くことについては、普段から日記を書いたり、生活科の観察日記を書いたりすることで慣れてはいるが、書く内容や量に個人差が大きい。また、文字を書き間違えることも多く、書くことを苦手とする児童が多い。学習中に集中して取り組むことができない児童も数名いる。

また、○年度の佐賀県学習状況調査の第○学年の国語の結果において、「必要に応じて事例を挙げて書く」（県正答率 46.8 無解答率 3.7）、「メモを基に、書こうとすることの中心を明確にして書く」（県正答率 46.3 無解答率 6.2）となっている。どちらも県の正答率が低く、さらに無解答率の割合も高いという結果がでていた。このことから、メモをしっかりと書き、それを基に構成を考えて文章を書くことに課題がみられる。本単元は、児童にとってメモを基に、構成を意識した文章の書き方を習得するために有効なものとする。

「指導観」について



「指導観」って、どんなことを書けばいいのだろう？

POINT



「指導観」は、単元（題材）観と児童（生徒）観を踏まえ、目標を達成するための指導や支援の手立てを具体的に記述します。単元（題材）全体を見通して記述することが大切です。

【記述例】

本単元では、まずは書きたいという気持ちをもつことができるようにするために、教師が事前に作った「〇〇小じまんブック」のモデルを見せる。児童に、同じような「△△小じまんブック」を作って、それを他の学校の友だちにも見せるということを伝え、自分たちも作ってみたいという意欲を高め、最後まで関心を持って書き進めることができる手立てとする。

第一次では、子供達が単元への興味をもつことができるようにするために、まずは学校の自慢できることについて考え、発表する場を設ける。そして完成モデル文を見せ、本単元に対する興味・関心を高めることで、完成までのゴールをイメージするとともに、「じまんブックを作ってみたい」という気持ちが高まるようにする。次に、この単元ではメモを活用して書くことを知らせ、全員で意見を出し合いながら学習計画を立て、本単元の見通しを持つことができるようにする。そして、メモというものがどういうものかに気付いた後、自慢したいことのメモを書く。そのメモについては、その後の授業につなげていきたい。

第二次では、まず、メモを詳しくすることを学習する。その際、自分が最初にしたメモを用い、学習後にはメモが増えたことに対する満足感をもつことができるようにしたい。そのため、詳しくするには五感を使うとよいことに気づき、その視点でメモを増やし、膨らませるようにしたい。その上で、メモを詳しくすることの良さにも気付くことができるようにしたい。次に、文章を分かりやすく伝えるための構成について学習する。初めに「はじめ」「中」「おわり」の構成について教え、自分のメモを使って構成を見直す活動へとつなげていく。そうすることで、自分のメモが更によりよくなり、伝えたいことが明確になっていることに気づき、「早く書きたい。」という気持ちを高めていきたい。その構成メモを使って文章を書いた後、推敲する。そこでは、文章を書いた後は何度も読み直す大切さに気づき、習慣化につなげたい。推敲したものを清書する際は、他の学校の友だちも読むということを伝え、丁寧に書こうという意識を高める。

第三次では、書き上げた文章で交流会をするが、その際は読む視点をもつことで、感想を伝えやすくする。この感想交流を通して、自分の文章の内容や表現のよいところを見つけたり、感性や情緒を養ったりすることもねらいとした。

単元を通して、作文を書く際には、メモをとることの大切さや便利さにも気付くことができるようにしていきたい。



「単元の目標」、「単元の評価規準」について

「単元の目標」で書くことは分かるけど、「単元の評価規準」は、何を書いたらいいのだろう？

POINT



「単元の目標」は、単元を通して身に付けるべき力を記述します。3観点ごとに書く場合と、1文にまとめて書く場合があります。

「単元の評価規準」は、単元目標の裏返しと考え、単元目標をより具体的にして記述します。

【単元の目標】

【観点ごとに記述した単元の目標例（国語）】

- （１）主語と述語との関係，修飾と被修飾との関係，接続する語句の役割，段落の役割について理解することができる。（知識及び技能）
- （２）書く内容の中心を明確にし，内容のまとまりで段落をつくったり，段落相互の関係に注意したりして，文章の構成を考えることができる。（思考力，判断力，表現力等）
- （３）自分の考えとそれを支える事例との関係を明確にして，書き表し方を工夫することができる。（思考力，判断力，表現力等）
- （４）言葉がもつよさに気付くとともに，幅広く読書をし，国語を大切にして，思いや考えを伝え合おうとする。（学びに向かう力，人間性等）

【単元の評価規準】

【記述例】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①主語と述語の関係，修飾と被修飾との関係，接続する語句の役割，段落の役割を理解している。	①「書くこと」において，書く内容の中心を明確にし，内容のまとまりで段落をつくったり，段落相互の関係に注意したりして，文章の構成を考えている。 ②「書くこと」において，自分の考えとそれを支える事例との関係を明確にして，書き表し方を工夫している。	①進んで，自分の考え方が伝わるように書き表し方を工夫し，学習の見通しをもって，説明する文章を書こうとしている。

評価規準作成の手順は、下記の URL を参照してください。

- ・ 国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための参考資料」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>
- ・ 佐賀県教育センター「学習評価の進め方」
<https://www.saga-ed.jp/contents/hyouka/>

POINT



「指導と評価の計画」、「本時の指導」について

POINT



指導と評価の計画では、毎時ごとの主な学習活動やねらい、指導上の留意点、評価規準、評価方法などを記述します。下記に示している記述例以外にも、様々な書き方があります。

詳しくは、国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための参考資料」

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html> を参考にしてください。

【記述例】

時	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評価規準（・） 評価方法等（__）
4	○夏休みの思い出を友達に報告するためにはどのような順序で話したらよく伝わるかを考えながら、ワークシート①の該当箇所にカードを置き、その理由を書く。	・物事や対象についてどのような順序で説明すると伝わりやすくなるか(例えば、経験した順に並べるなどの時間的な順序、感動の大きかったことの順に並べるなどの事柄の順序)について例を示す。	【思考・判断・表現①】 ワークシート① ・カードの並び順とその順序にした理由の確認

5 指導と評価の計画

6 本時の指導（記述例 4／9）

（1）本時の目標（本時の学習で子供に身に付けさせたい事柄について具体的に記述します。

また、子供の学習目標として書くことが一般的です。）

【記述例】伝えたいことを明確にするために、メモを詳しくすることができる。

（2）本時の展開（項目は教科・領域や学校ごとによって変わってきます。一般的な例を提示します。）

学 習 活 動	（○）指導上の留意点 （◆）評価	備 考
*この欄に学習のめあてを書く。子どもに示す形で本時の活動目標を書くことが多い。		
*学習活動には、子供の立場から各時間の主たる活動を書く。 *大項目：1 2 3 … 中項目：(1)(2)(3)… 期待する子供の発言等は「・」で起こす。 *子供側からの行動表現で書くようにする。 “振り返る。読む。書く。話し合う。” など	*指導上の留意点には、学習活動における手立てや押さえておく事柄を書く。 *教師の指示や働きかけなど教師側からの表現で書く。 “見通しをもたせるために～という支援をする。気付かせるために～する手立てを取る。” など *評価規準は『5 指導と評価の計画』の評価規準に対応させて記述する、基準に届かない子供に対する手立てを具体的に書く。 評価規準例 「筆者の訴えたいことを、本文中のキーワードを使って、条件に合わせてまとめることができる。[思]ワークシートの記述内容」 → キーワードを提示したり、筆者の主張部分に線を引いてみるよう促したりして理解につなげる。	*使用する ICT 機器 *教科書の資料
*この欄に学習のまとめを書く。めあてとの整合性を図り、設定する。		
*学習を「振り返る」時間を設ける。		

POINT



「振り返る」時間を大切にしたいものです。子供自身が「今日のめあてを達成できたかな？何が足りなくて、これから何を頑張ったらいいんだろう？」と自分を客観視することが大切です。それが次の学習意欲につながり、子供自身が学び始める第一歩となるのです。

資料 ③

授業を学びにするための教師の役割 Q&A

つかむ

Q：子供が自分事として捉えられるようにするにはどうすればいいの？

A：子供が興味関心を持つような課題提示の工夫をしたり、前時の子供の振り返りを活用したりします。子供といっしょにめあてを立て、子供自身が見通しをもてるようにすることも大切です。課題提示の工夫として、例えば次のようなことが挙げられます。

- 既習事項と比較して違いを明らかにする。
- 複数の資料を提示して疑問をもたせる。
- 一部を隠して予想をさせながら、少しずつ提示していく。
- 課題をイメージしやすくするために、具体物を見せたり ICT を活用したりする。

Q：「めあて」はどのように立てればいいのか？

A：子供の発言（疑問や気づき等）をもとに、一緒にめあてを立てます。活動によっては、子供たち自身が自分に合っためあてを立てることもあります。

☆めあてに入れる要素(例)

- ◆ ねらいを達成した姿（何ができたらよいか）
- ◆ ねらいの達成に向かう手段や条件や観点

Q：子供自身が「見通し」をもてるようにするうえで大切なことは？

A：活動の選択肢を与えたり、必要な時間を尋ねたりして、子供自身が見通しを持てるように支援していくことが大切です。

☆確認する内容(例)

- ◆ 何をどんな順番で行うのか
- ◆ どれくらいの時間で行うのか
- ◆ 活動が早く終わったら、何をするのか



やってみる

Q：子供が自力解決したり試行錯誤したりしながら活動できる時間にするためにはどうすればいいの？

A：「書く活動」「話し合う活動」を取り入れます。型としてその活動を取り入れるのではなく、「何のために行うのか」という必然性をもたせることが大切です。また、自由に話し合える雰囲気を作るために、机の配置を工夫することも考えられます。個人差に応じた支援をすることも必要です。

Q：「書く活動」ではどんなことに気を付ければいいのか？

A：ノートやワークシートの書き方、使い方を確認し、何についてどのように書けばよいかなどの具体的な視点を示します。

☆「書く活動」の具体的な視点(例)

- ◆ 結果だけでなく、解決の過程も書く。
- ◆ 中心となる考えとともにその 根拠や理由を書く。
- ◆ 思考を促すポイントやキーワードを使って書く。
- ◆ 複数の資料を比較し、考えたことを書く。
- ◆ 操作や観察をしてわかったことを図や表などに書く。

どの活動も、何のためにするのかという目的をはっきりさせた上で、必要に応じて取り入れることが大切です。



Q:「話し合う活動」ではどんなことに気を付ければいいのか？

A:必然性をもった「話し合う活動」になるよう、目的や時間、具体的な視点を示しましょう。
また、「話し合う活動」のポイントを日頃から示しておきましょう。

☆「話し合う活動」の具体的な視点(例)

◆【内容】

- ・速くて簡単にできる方法はどれかな？
- ・結果から考えられることは何？
- ・〇〇といえるのは、どの叙述からかな？

◆【方法】

- ・話し合ったことをボードに書いて貼りましょう
- ・一番よい考えを一つに絞りましょう

☆「話し合う活動」のポイント(例)

- ◆ 相手に考えを伝わりやすくするために、まず「結論」を一文で、次に「理由・根拠」を話す。
- ◆ 解決できていない(考えがまとまっていない)ときは、できたところまでを伝える。
- ◆ 聞くときは、まずは友達の考えや意見のよさを見つける。
- ◆ 考えや意見に対して、感想を述べたり質問したりする。

Q:「個人差に応じた支援」とはどんなことをすればいいのか？

A:例えば、次のようなことが挙げられます。

- つまずきの原因を対話や観察で確認する。
- 思考を助ける学習用具やヒントカード等を用意する。
- 処理の速い子供には他の考え方を求めるように声をかけたり新しい課題を用意したりする。
子供たちが自分で課題解決に向けて支援を求めたり、活動方法を考えたりできるように、必要に応じて「何か困っている?」「何か手伝おうか?」等の言葉をかけましょう。



Q:子供が知識を広げたり理解を深めたりするためにはどうすればいいのか？

A:子供が考えの出しっぱなしにならないように、全体での「話し合う活動」をコーディネートします。
また、理解しやすくなるような板書をします。

Q:「話し合う活動」をコーディネートするとはどんなことをすればいいのか？

A:教師の考えを押し付けてしまわないよう、子供達の発言やつぶやきを大切にしましょう。子供による説明の不十分さは、教師が言い換えるのではなく、子供同士の発言をつないで、補ったり言い換えたりします。話し合ったことの達成感を味わえるよう、新しく生み出された考えや活動そのもののよさについて伝えましょう。

☆コーディネートする発問(例)

- ◆ 「どうしてそう考えたの?」(理由)
- ◆ 「本当にそうかな?」(ゆさぶり)

Q:分かりやすい板書のポイントは？

A:一時間の授業の流れが分かるように、学年に応じた文字の大ききで書きます。色チョークは重要事項が明確になるよう、意図をもって使うことが大切です。子供の発言を簡潔にまとめたり、子供の板書利用を意図的に仕組んだりしましょう。

☆板書内容(例)

- ◆ 単元名(教材・題材名)
- ◆ 学習のめあて
- ◆ 学習の方向付け
- ◆ 理解を助け思考を深める内容
- ◆ 子供の発言・発表の内容
- ◆ 「めあて」に対応した「まとめ」



振り返る

Q：子供の変化や成長を認めるためにはどうすればいいの？

A：本時の「まとめ」をし、分かったこと、できたこと、身に付いたこと等を確認します。また、「振り返り」の時間を確保します。変化や成長が見られたら、コメントで返したり皆に紹介したりして伝えることが大切です。

めあてと対応したまとめにすることが大切です。

Q：「まとめ」はどのようにすればいいの？

A：子供が学習内容を理解し、学んだことを具体的な力として自覚できるようなまとめになるよう支援しましょう。教師がまとめてしまうのではなく、子供の発言をつないでまとめたり、キーワードを提示して子供自身がまとめたりできるようにしましょう。



Q：「振り返り」はどうして必要なの？

A：「振り返り」を行う目的は、子供自身が学習の達成感を味わい自己の成長に気付いたり、学んだ内容を再確認し、次時につながる学習意欲と見通しをもったりできるようにするためです。振り返りの時間を確保できるよう方法を工夫したり、自己の成長に気付けるように視点を与えたりしましょう。また、振り返りもみんなで共有しましょう。

☆「振り返り」の方法(例)

- ◆ 練習問題に取り組む
- ◆ 項目に○をつける。
- ◆ 数値で表す 等

☆「振り返り」の視点(例)

- ◆ わかったこと、できるようになったこと
- ◆ 交流による気付き
- ◆ 今後に生かしたいこと、さらに知りたいこと 等

「とことん学び続け、とことん学び合う人」の人生は人格の完成を目指した
人格の形成につながっていく。



人格の完成を目指した教育活動

生きる力の三要素【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

A 確かな学力【頭を使う（考える）】

B 豊かな心【人と関わる】

C 健やかな体【体を使う】

義務教育 9 年間で育ってほしい 10 の姿

- 1 主体的に社会の形成に関わる態度 B
(自主・自律、協同、規範意識、公正な判断力、
公共の精神)
- 2 生命尊重・自然愛護の精神・態度 B
- 3 国や郷土を愛する心・国際理解・国際親善 B
- 4 家庭生活、学校生活、社会生活の充実 B
- 5 国語の理解と伝達能力 A
- 6 数量関係の理解と処理能力 A
- 7 自然現象の科学的理解と処理能力 A
- 8 生活習慣、体力向上、心身の調和的発達 C
- 9 芸術の基礎的な理解と技能 B
- 10 勤労の精神、進路選択能力 B

参考資料：学校教育法（抄）

【幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿】

- 1 健康な心と体 C
- 2 自立心 B
- 3 協同性 B
- 4 道徳性・規範意識の芽生え B
- 5 社会生活との関わり B
- 6 思考力の芽生え A
- 7 自然との関わり・生命尊重 B
- 8 数量や図形、標識や文字への関心・感覚 A
- 9 言葉による伝え合い A
- 10 豊かな感性と表現 B

出典：幼稚園教育要領 第 1 章 第 2 の 3

「自ら学び続け 学び合う子供」 ガイドブック

【別冊資料】 Version.1

～指導案の作り方と授業づくりのヒント～



令和4年5月
西部教育事務所